学校だより

〈学校教育目標〉自ら学び　たくましく　心豊かな子

横浜市立長津田小学校
５月号【第624号】
令和6年4月30日
校長　佐藤　正淳

愛と想いがクロスし 未来へつながる

『ホ～ホケキョ』 学校西側の森から“うぐいす”のさえずりが校長室まで届きます。春を告げる鳥ですから着任した４月初めにも鳴いていたのかもしれません。でも気付いたのは最近のことです。新しい生活の始まりは、身も心もその環境に慣れるのに精一杯。校長の私も“うぐいす”に気付かなかった程ですから、子どもたちにとってもこの４月は心身ともに疲れた日々だったのかもしれません。この連休期間、子どもたちに寄り添い、あたたかく包んでいただければと思います‼

学校だより５月号は、この１か月で感じた長津田小 “いいね” “凄いね” を書いてみます。

集団登校が培うものの価値

「長津田小は通年で“集団登校”しているんです」

交通事情等の地域性もありますので一概には言えませんが、「子ども同士のトラブル」「親の負担」などから見直す学校が増えてきているのは事実です。また新型コロナを契機（密を避けるため他）に廃止した学校の話も聞きます。３月まで在籍した学校でも、集団登校は学期はじめだけだったので、少し新鮮な目で、登校の様子を見てみました。

班長さんが先頭で、副班長さんは最後尾。班長さんは何度も何度も後ろを振り返ります。後ろを歩く下級生に歩調を合わせます。言葉もかけています。上級生に挟まれた１年生は安心して歩いています。坂道では、上級生が後ろから１年生のランドセルを押してあげる姿も見られます。暑い日も寒い日も。風の強い日も雨の日も。こんな相手を思いやる、相手の気持ちを想像する、そして具体のアクションとしてあたたかく支えています。この上級生の姿は、下級生の原風景として確実に紡がれていきます。集団登校の価値。積み重なるあたたかな心。優しい子どもたちの未来しか見えません。

尊いもの ～保護者の関わりと原風景～

「年３～４回ですかね。でも子どもたちの安全が第一なので…」

長津田小学校に着任して、“凄いな” “ありがたいな” と思ったことの一つに、下校時の保護者を中心とした見守りがあります。正門から信号にかけて、そしてその先の交差点と、合わせて３～６名の保護者や学援隊の方々が立ってくださっています。確かに、信号のある交差点は交通量が多く、学校側の坂道に入ってくる車もあるので、安心できる場所とは言えません。保護者のサポートがどれほど子どもたちの安心安全につながっていることでしょう。“年３～４回”お仕事を調整して立たれている方も多いと思います。上記登校班と同じく、雨の日も風の日も、子どもたちのために思いとお力を寄せてくださいます。世の中的には“PTA 不要論”などが話題となる中、本当にありがたいことです。頭が下がります。

その姿を見ているのは誰でしょうか。それは『子どもたち』です。見守られている安心感と感謝の気持ち。毎日目にするその姿は、子どもたちの豊かな記憶として蓄積されます。その姿が原風景となり、中学生、高校生…大人となり『今度は自分が誰かのために』と、あたたかな想いへと昇華します。

各種ボランティア（野草園、図書、給食、まち探検、おやじの会）の方々や稲作、お囃子、野菜作りのご協力をいただいている方々の尊い姿は…子どもたちの明るい未来へとつながります。